

京都大学埋蔵文化財調査報告 IV

—京都大学病院構内遺跡の調査—

第1章 病院構内遺跡調査の経過と成果

第2章 遺跡の形成と地形の変化

第3章 病院構内の先史時代遺跡

第4章 白河の条坊地割

第5章 中世白河の鑄造工房

第6章 土取りの歴史的変遷

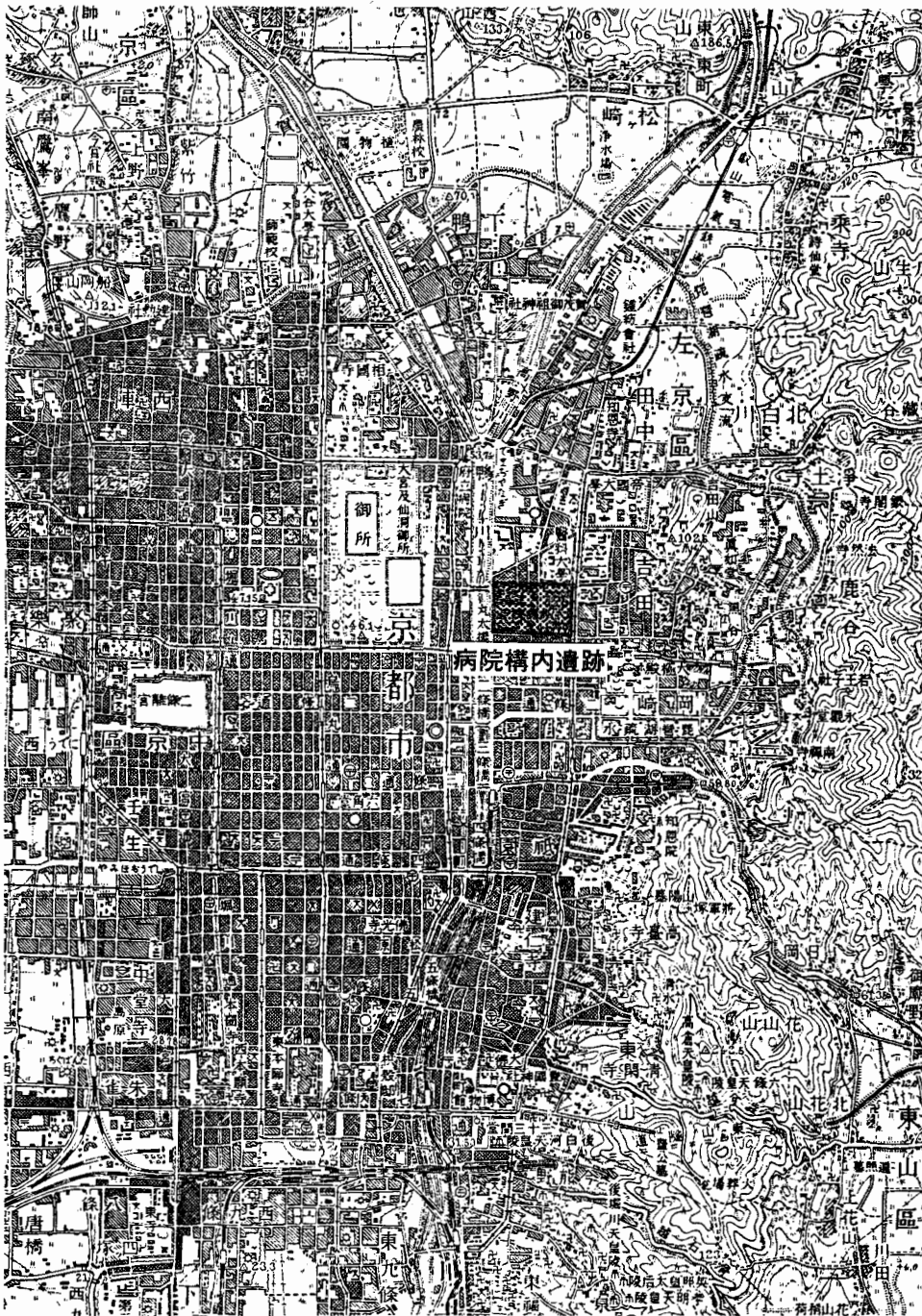


図1 京都大学病院構内遺跡の位置（陸地測量部発行 昭和6年都市近郊図『京都』）

第1章 病院構内遺跡調査の経過と成果

西川幸治 清水芳裕 森下章司

1 調査の経過

京都大学医学部附属病院構内において、はじめておこなわれた考古学的な発掘調査は、1976年度の医療技術短期大学部校舎等の新営にかかわる調査であった。この調査によって当時周知の遺跡となっていた北部構内、教養部構内にくわえて、病院構内をふくめ吉田地区全体に遺跡が広がっていることが明らかになり、京都大学全構内の遺跡調査を恒常的におこなう組織が必要となった。そこで、発掘調査を実施する組織として京都大学構内遺跡調査会、調査や保存について研究する組織として京都大学埋蔵文化財研究センターが設立され、1977年度以降、構内遺跡の調査と保存について積極的に取り組むことになったのである。以来、現在に至るまで、表(P. 5)にまとめたように、病院構内においては11件の発掘調査、10件の試掘調査、15件の立合調査をおこない、縄文時代から近世にいたる各時代の遺構、遺物が構内全体に広く分布していることを明らかにしてきた。

1976年度と1977年度に2次にわたっておこなった医療技術短期大学部校舎新営地(病院構内A E 15区、A F 14区)の調査の成果は、『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白井北殿北辺の調査—』(1981年)として報告した。そこではとくに古代から中世にかけての遺物・遺構の編年、考古学的な調査の成果と文献資料との対照による鴨東の歴史的な変遷の復原をおこない、その後の研究の基礎とした。

1978年度から1981年度にかけては、試掘・立合調査を経て病院構内各所において、中世・近世の遺跡が保存されていることを確かめたが、1979年度におこなった和進会館移転予定地(A K 18区)の試掘調査で検出した中世の遺物を含む土坑は、その後の調査の進展で土取り穴であることがわかった。この土取りは医学部構内北半では中世に、その南半から病院構内では近世にそれぞれおこなわれており、医学部構内から病院構内にわたる範囲に広がっていることが、明らかになった。

1984年度におこなった医学部附属病院全身用 NMR-CT 装置棟新営予定地(A F 19区)の調査では、幕末の歌人大田垣蓮月に関わる遺物を検出し、19世紀中葉の貴重な一括遺物を得ることができた。また、この調査では、高野川系旧流路層から縄文土器を検出し、吉田山西南麓に広がる微高地に縄文集落が存在した可能性を見いだした。

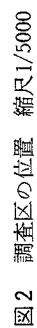


図2 調査区の位置 縮尺1/5000

一 覧

地点	年度	地区	調査	文献	遺構	遺物
4	1976	AE15区	試掘	泉 77	ビット	土師器, 瓦
5		AE15区	発掘	岡田 77	池, 溝	土師器, 瓦
6		AH17区	試掘	泉 77	なし	土師器, 瓦
16		AH18区	試掘	泉 77	溝	土師器, 瓦
22		AH17区	発掘	泉 77	溝, 井戸, 集石	土師器, 陶磁器
26		AI18区	立合	泉 77	石敷	土師器
39	1977	AF14区	発掘	岡田・宇野 78	護岸, 井戸, 溝, 石列	弥生土器, 土師器, 須恵器
47		給水管	立合	泉・宇野 78	なし	
53	1978	電気管	試掘	京大埋文研 79	なし	
59		AK10	立合	樋口・亀井 79	なし	
63		電気管	立合	樋口・亀井 79	なし	
72	1979	AK18区	試掘	泉・浜崎 81	中世土取り穴	土師器
86	1980	AK16区	試掘	泉・浜崎 81	なし	
87		AG14区	試掘	泉・浜崎 81	近世包含層	土師器
88		AJ17区	試掘	泉・浜崎 81	中世溝	土師器, 陶磁器
97		ガス管	立合	京大埋文研 81b	なし	
108	1981	AK17区	試掘	浜崎 83	なし	
122	1982	AF15区	発掘	浜崎 84	井戸, 中世土坑, 列石遺構, 溝, 櫛列	土師器, 瓦器, 須恵器, 陶磁器
141	1984	AF19区	発掘	浜崎・宮本 87	旧道路, 中世土取り穴, 井戸	縄文土器, 土師器
142		AJ19区	発掘	京大埋文研 87	近世池, 土坑, 野壺	焼盆壺
145		AG13区	立合	京大埋文研 87	中世土坑, 柱穴, 溝	土師器, 陶磁器
150		AF20区	立合	京大埋文研 87	なし	
154	1985	AJ18区	発掘	五十川・浜崎 89	中世井戸, 野壺, 櫛列, 高野川系流路	縄文土器, 土師器, 焼盆壺, 陶磁器
155		AJ19区	発掘	五十川・浜崎 89	近世土取り穴, 土坑	土師器, 須恵器, 陶磁器
161		AE10区	立合	京大埋文研 89	井戸, 溝, 近世土取り穴	
162		AE19区	立合	京大埋文研 89	近世包含層	
171	1986	AH15区	試掘	京大埋文研 90	なし	
173		AJ10区	立合	京大埋文研 90	なし	
177		AH10区	立合	京大埋文研 90	中世包含層	土師器, 陶磁器
178		AK16区	立合	京大埋文研 90	なし	
179		AJ13区	立合	京大埋文研 90	なし	
184	1987	AH10区	立合	中世包含層		土師器, 陶磁器
186		AH20区	立合	縄文河川		縄文土器
191	1988	AH19区	発掘	京大遺跡調査会 88	土坑, 溝, 井戸, 柱穴	縄文土器, 土師器, 須恵器, 瓦器
192		AE12区	発掘		道, 井戸, 野壺, 溝	土師器, 陶磁器, 土製品
198	1989	AE13区	発掘		井戸, 野壺, 溝, 柱穴	土師器, 瓦, 陶磁器, 土製品

病院構内遺跡調査の経過と成果

1985年度の医学部附属病院内科系病棟新営予定地（A J18区）、医学部内科系臨床研究棟新営予定地（A J19区）の調査では、調査面積の総計は7295 m²に及び、古代の遺構、中世の多数の井戸、近世の井戸や大規模な土取り穴を検出した。井戸の変遷や土取り穴の構造等を明らかにしている。また鞠の羽口、埴塼、鋳型など中世の鋳造関連遺物も出土した。教養部構内では平安時代、医学部構内では中世の梵鐘鋳造遺構を発見しており、鋳造関連の遺構・遺物が病院構内まで広がることが判明している。

1988年度から1989年度にかけておこなった医学部附属病院中央診療棟・臨床研究棟新営予定地（A H19区）の調査では、多数の中世、近世の遺構を検出した。また福勝院に関わる遺構ではないかと想定される、墨書土器を含む多数の土師器が一括投棄された土坑を検出した。東西方向に向かう中世の溝は地割を復原する資料となり、また近世の大規模な溝も検出した。さらに下層の白川系旧流路においては、一時期の肩と思われる部分から、縄文後期前半の土器がまとまって出土し、このことから東に隣接する微高地に縄文集落が存在した可能性が一段と強まった。

さらに、これまでの中でもっとも西の地区の調査（A E12・13区）を2次にわたっておこない、中世の遺物包含層はこの地まで続いていること、近世末に耕作地として利用されるに至ったことを確認した。中世後半まで旧高野川系流路の氾濫原として開発の手が及んでいなかったことがわかり、土地利用の変化をうかがう資料とすることができた。

2 遺跡の環境

(1) 地理的環境

京都大学吉田キャンパスは京都盆地の北東部、比叡山西南麓の西辺に連なる扇状地の扇央部から、鴨川に至る平地部に位置する（図1）。したがって構内東半部は、扇状地をとりまく微高地上に、また西半部は高野川の旧流路が形成した後背地上に立地する。病院構内はこの西半部の南半にあたる。その地理的変遷の過程は今日の地形にも痕跡がみられ、現地表面の標高が北部構内東端で約68 m、病院構内の西南端では約47 mと、構内全体の標高差はおおよそ21 mにのぼる。比叡山西南麓一帯から吉田山周辺の微高地上には縄文時代以降の遺跡が点在し、そのひとつが北部構内に広がる北白川追分町遺跡である。この微高地上にはその後も歴史時代に至るまで人々の活動の痕跡が残されていることが発掘調査によって明らかにされている。これに対して、病院構内を含む西半部では、明瞭な遺構をともなってその活動が知られるのは平安時代以後である。

(2) 歴史的環境

鴨川の治水が非常に困難な事業であったことはよく知られている。鴨川に隣接する病院構内一帯が初めて文献にあらわれるのも、平安中期の治水に関連する土木事業の記事からである。『権記』長保6(1006)年3月10日条に「防河の水を東流に移す。師宮見給う、」、『御堂関白記』長保6年5月11日条には「鴨河上方一条より近衛御門末に至りて落水す」との記事があり、鴨川の東側に新河道が作られたことがわかる。その地点はほぼ病院構内遺跡の近辺にあたるものと考えられる。ところが『御堂関白記』同年6月2日の条には、この夏の大雨によって新堤防が破壊されたとの記事がみられる。さらに『本朝世紀』康治元(1142)年8月25日条によれば水害を防ぐために河床の掘り下げがおこなわれたが、同年9月2日の条では、大雨による氾濫のためたちまち元通りになってしまったことが記されている。こうした不安定な状況は中世、近世に至るまで続いた。

病院構内一帯の開発が本格的に開始される契機は、平安時代の六勝寺の造営による。白河天皇の法勝寺(1077年)に始まり、堀河天皇の尊勝寺(1102年)、鳥羽天皇の最勝寺(1118年)、待賢門院璋子の円勝寺(1128年)、崇徳天皇の成勝寺(1139年)、近衛天皇の延勝寺(1149年)が次々と建てられ、これとともに院の御所や公家の邸宅、諸寺院の建立が続き、岡崎一帯から病院構内にかけての様相は一変した。

六勝寺造営にともなった市街地形成の過程については、平安京の条坊を鴨川以東へ延長させ、同様の形態をとった方格状の街区であったという考案にもとづいていくつかの復原がなされている。杉山信三は六勝寺の寺域復原にもとづいて、周辺の条坊および街区の部分的な考察を試みている。また岡田保良は近年の発掘調査によって得られた溝あるいは建物の遺構の方位をもとにして、条坊の復原をおこなった〔岡田81〕。

古代末に建立された福勝院は、京都大学構内一帯に位置したと考えられる御堂のひとつである。鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の御願により建立された寺院であり、九輪阿弥陀堂をはじめとして三重塔、寝殿、護摩堂をそなえていたことが知られている。『兵範記』の記述をもとに杉山信三は近衛末の北、つまり教養部構内南半の吉田寮付近にその所在を比定している〔杉山62〕。杉山は規模を方一町としたのに対して、川上貢は九輪阿弥陀堂などの建物規模から方一町にはおさまらないとして、その範囲を広く考えている〔川上77〕。

中世に病院構内一帯が文献にあらわれるのは法勝寺焼亡に関する記事である。暦応5(1342)年3月法勝寺焼亡の火元が7～8町北の勘解由小路仏所小路の帥法院宿所とあり、これが病院構内東半付近に比定される〔福山43〕。また、この構内は熊野社の社領の中に

組み込まれる。病院構内の北半付近で吉田社の社領と接し、熊野神社境内管領を聖護院に命じた『東寺文書』応永3年12月18日將軍義持御教書によると熊野社の社領は崇徳院と大吉祥院敷地を除いて「近衛以南、大炊御門以北、今辻子以西、至于河原」の範囲にあったことが知られている。

その後室町後期ごろから田畑化されたようで、それは近世に引き継がれ、畑作地として蔬菜の栽培で著名な地ともなった。近世後半の景観は元治元(1864)年に木村明啓と川喜多真彦によって描かれた『花洛名勝図会』東山之部によってみることのできる(図3)。中央やや右に熊野社が位置し、2つの鳥居を通り抜ける道が参道にあたる。熊野社の左上に聖護院が位置する。この参道は現在の丸太町通りにあたり、病院構内はその左側に位置することになる。病院構内東南の一带は聖護院村の一部に組み込まれていた。この参道から、図の左にそびえる比叡山に延びてゆくように描かれた白川道と百万遍の間の、現在の京都大学構内にあたる一帯のほとんどがはねつるべの点在する田畑で占められていることがわかる。一方、幕末に描かれた富岡鉄斎による『聖護院村略図』によれば、この熊野社への参道沿いは大田垣蓮月、画家中島華陽・小田海仙、歌人税所敦子など多くの文人たちの居住するところともなっていた。

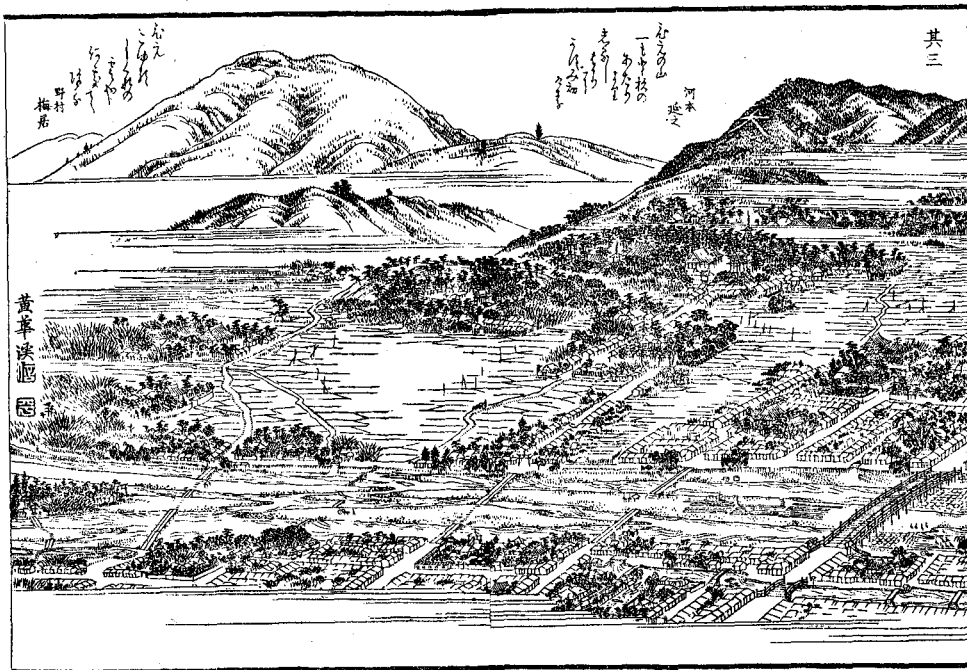


図3 江戸時代末の東山(『花洛名勝図会』元治元(1864)年)

調査の成果

3 調査の成果

(1) 層 位 (図4)

病院構内遺跡の層は3つに大別できる。その1は、基盤を形成する砂礫層、シルト層であり、高野川系、白川系旧流路の堆積物である。これらの流路は流れを幾度も変えており、一時期の肩にあたる部分を各所で検出している。構内東半のAH19区ではそうした肩の部分から縄文後期の土器がまとまって出土し、構内西半のAF14区では平安中期の護岸施設を検出しており、各時期の流れの転変の様をうかがうことができる。また高野川系旧流路の後背湿地の地形が形成された時期に白川系旧流路の比較的緩慢な流れが運んだシルトや粘土の堆積層は、中世・近世の土取りの対象となった。

その2は青灰色粘土・茶褐色土を中心とする古代・中世の遺物包含層である。古代の遺構は構内東半の3ヶ所で検出しているが、包含層は削平のため残っていない。中世の遺物包含層もAF14区の護岸施設以西では検出していない。また構内東半北部のAJ18・AJ19区では近世の大規模な土取りによって、中世遺物包含層はほとんど攪乱されており、また南部のAF19区でもこの層は検出していない。

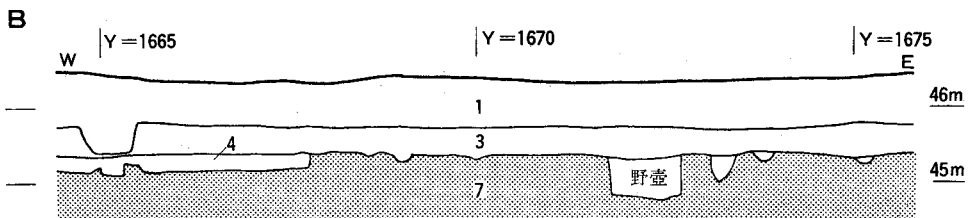
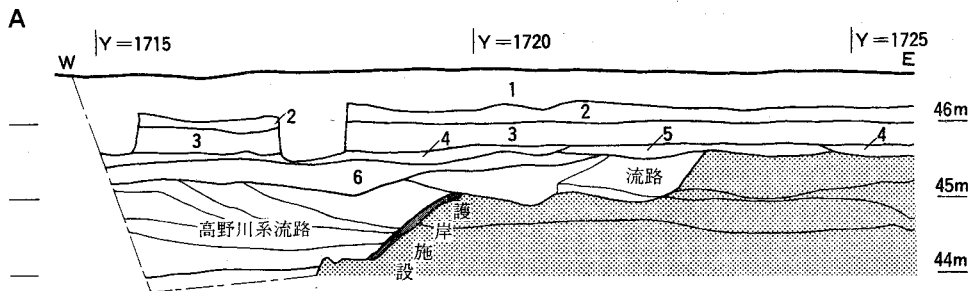
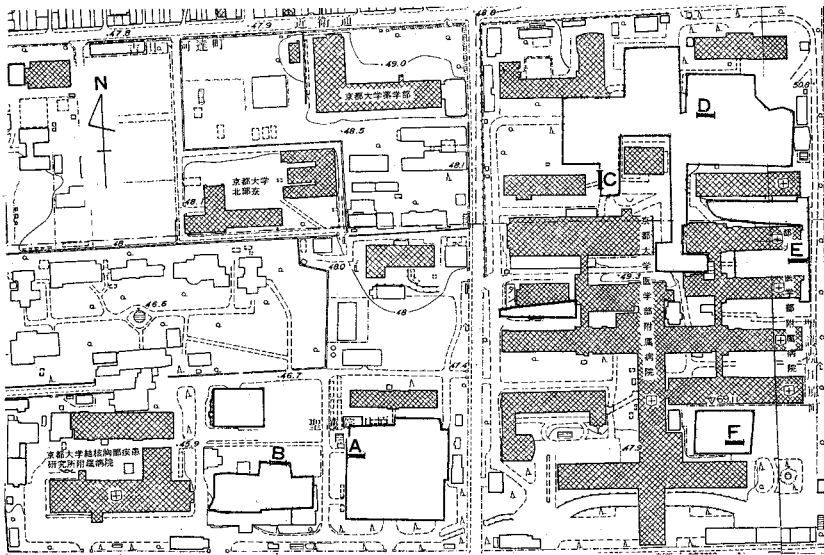
その3は暗褐色土と灰黒色土を中心とする近世後半の遺物包含層である。大部分が耕土で、遺物は比較的少ない。近世遺物包含層は全調査区で検出されており、『花洛名勝図会』に示されたように、この地一帯が近世後半には可耕地として安定したことを示している。

(2) 遺構と遺物 (図5～8)

病院構内の各時代の遺構・遺物の分布はほぼ明らかになっている。それによると、古墳時代以前の遺物は構内東半で出土しているが遺構は発見されていない。奈良～平安時代の遺構はわずかに残されているが、多数の遺構の分布がみられるのは平安時代末以降のことである。それ以前は、高野川系旧流路のために安定した居住性は得られず、短期間の活動の痕跡をみることができのみである。遺構・遺物の量が増加し一定量検出できる時期は、六勝寺の造営・活動時期と一致する。しかし六勝寺の衰亡した14世紀になると、生活の痕跡は急速に失われ、田畑化したものと考えられる。そして18世紀末に聖護院村の北への展開にともなって、生活に関連する遺構・遺物が再び現われるようになった。

縄文・弥生時代の遺物 AF19区、AJ18・AJ19区・AH19区など構内東半の3ヶ所の調査区で、縄文時代の土器、石器、弥生土器を検出している〔浜崎・宮本87、五十川・浜崎89、京大調査会88〕。いずれも遺構をとまなうものではなく、流路の堆積による砂層、砂

病院構内遺跡調査の経過と成果



- | | |
|---------|--------|
| 1 表 土 | 5 赤褐色土 |
| 2 黒 色 土 | 6 灰色砂礫 |
| 3 灰黒色土 | 7 砂 礫 |
| 4 黄褐色土 | |

0 5 m

調査の成果

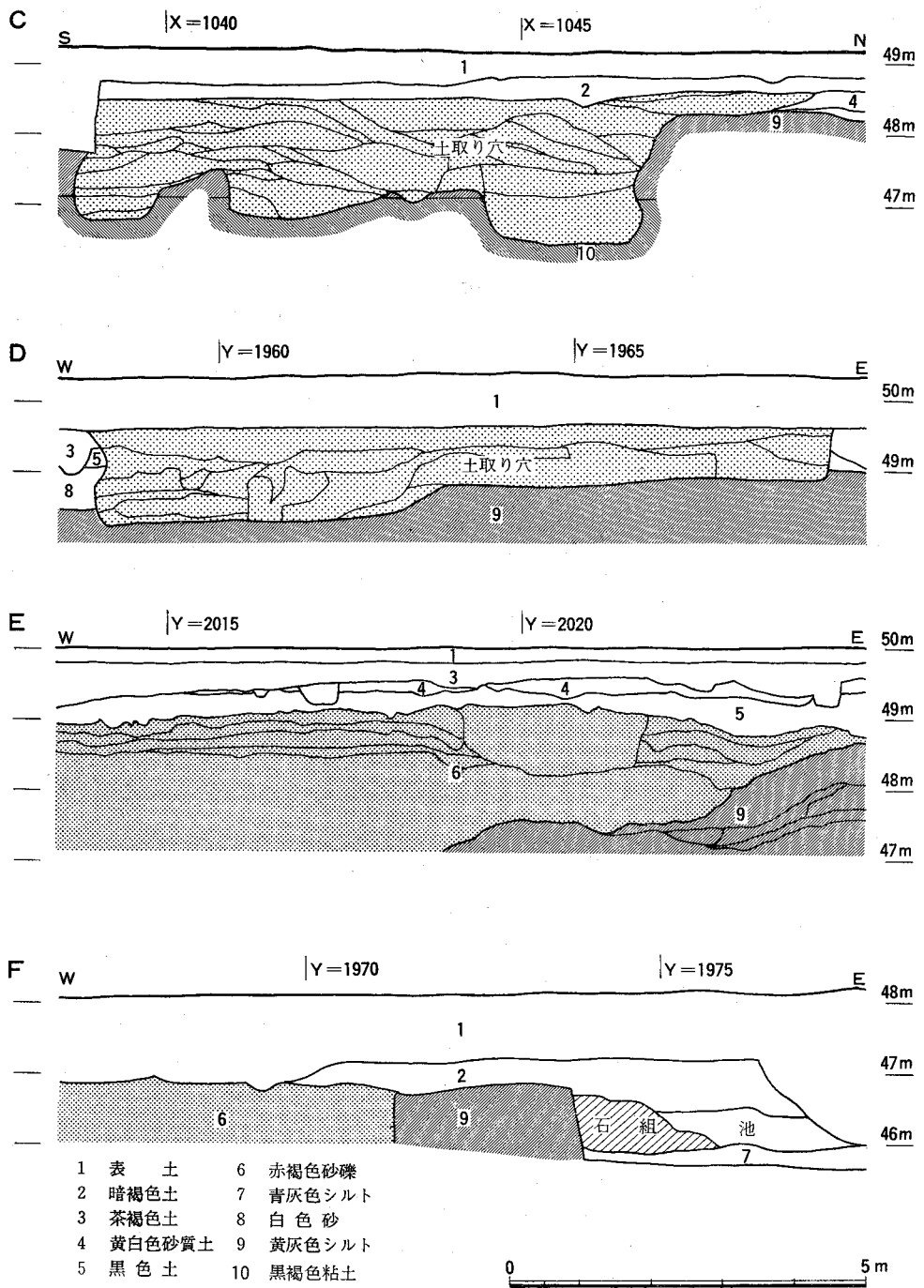
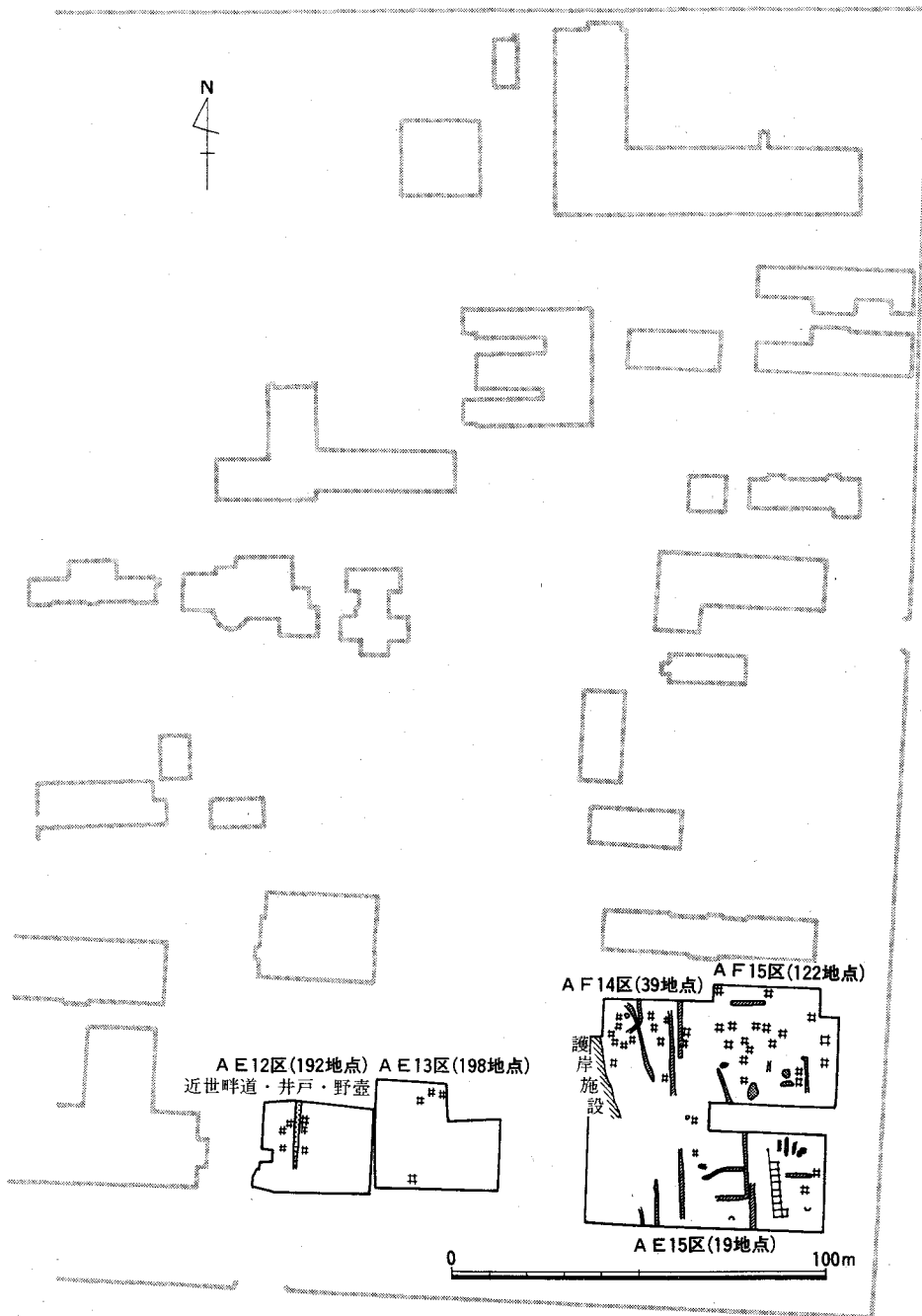


図4 病院構内遺跡の層位 縮尺1/100

病院構内遺跡調査の経過と成果



調査の成果

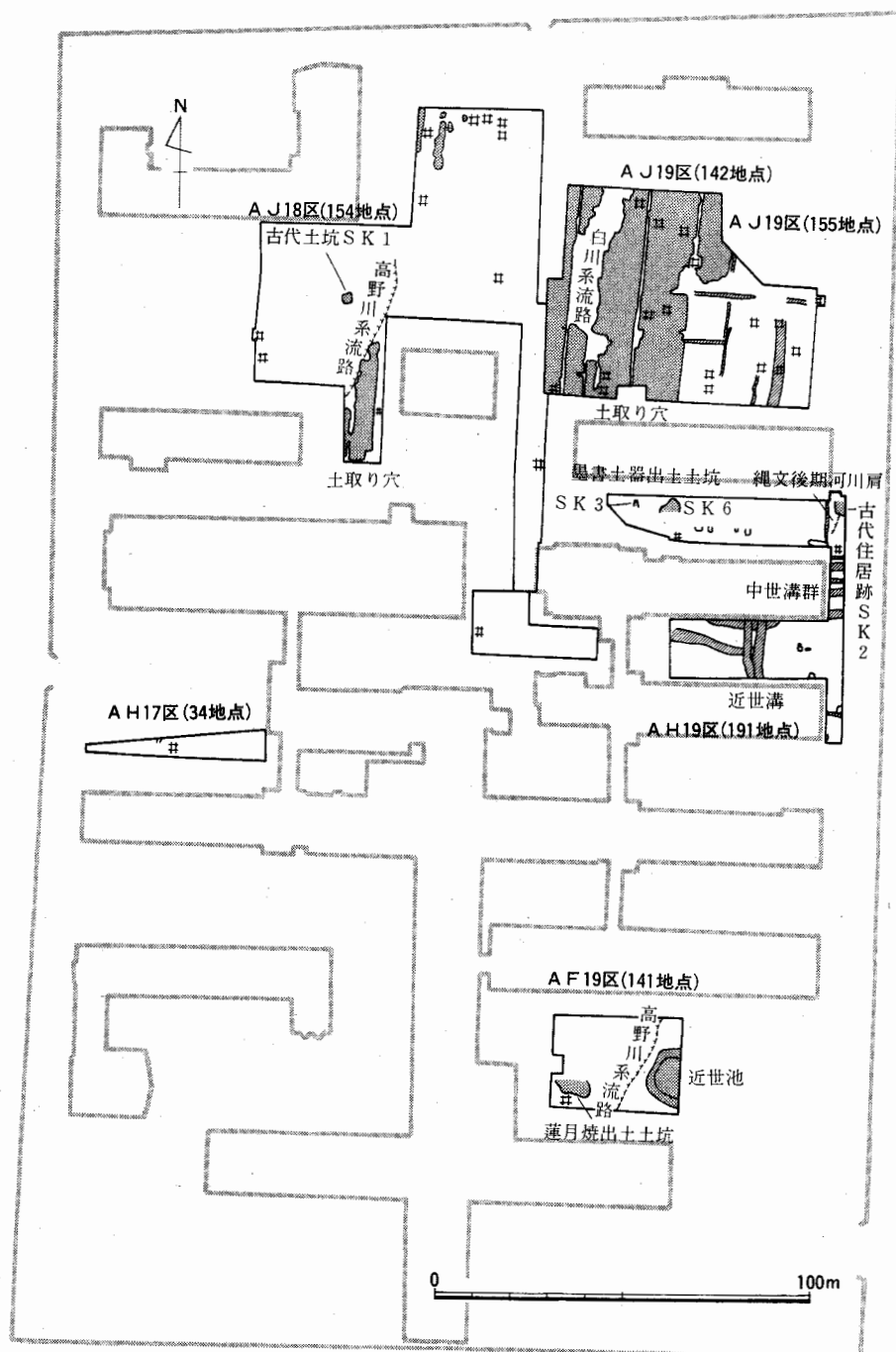


図5 病院構内遺跡の遺構 縮尺1/2000

礫層中から出土したものであるが、なかでもAH19区からは、河川の肩と思われる場所から縄文後期前半の土器がまとまって出土しており、調査区にすぐ隣接する地点に縄文時代の居住地のあったことがうかがわれた（第3章参照）。

古代の遺構 AJ18区の調査では、鉄滓、粘土塊、炭化物の詰まった土坑SK1を検出し、鉄の素材あるいは鉄器の生産に関わる遺構と考えた。出土遺物から7世紀後半から8世紀初めの年代に属する〔五十川・浜崎89〕。AH19区では、焼土や8世紀代の須恵器、土師器をとまなう方形の土坑SK2の一部を検出し、住居跡の可能性が高い〔京大遺跡調査会88〕。このように古代の遺構は、構内の東半に散在している。

古代・中世の遺物の編年 病院構内で大量に出土した古代・中世の遺物を検討する基礎的な作業として、AE15、AF14区の調査資料によってまとめた古代・中世の土師器皿を中心とする遺物の編年をおこなった〔宇野81〕。この平安京Ⅰ期から中世京都Ⅳ期にいたる時期区分を用い、病院構内のみならず他での中世遺跡の調査にも活用してゆくことになった。その後も、AJ18・AJ19・AH19区の調査で、中世遺物の良好な資料を検出し、編年の検討作業を続行している。

福勝院 鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の御願によって創建され、九輪阿弥陀堂をはじめとして寝殿、三重塔、鐘楼、護摩堂をそなえていた福勝院は教養部構内南半部に比定されているが、その正確な位置は不明であり、これに関わる遺構を検出することが課題となっている。直接関係する遺構は未検出であるが、AJ18・AJ19区の調査で検出した古代末から中世初頭にかけての多数の井戸や、AH19区で検出した、墨書土器を含む多数の完形の土師器皿を出土した12世紀の土坑SK3・SK6などは、福勝院に関連する可能性が強いものと考えている。さらに医学部構内AL20区では平安後期の密教法具である六器の鋳型が出土しており、『兵範記』に記された仁平2(1152)年、鳥羽法皇の五十賀算を福勝院で

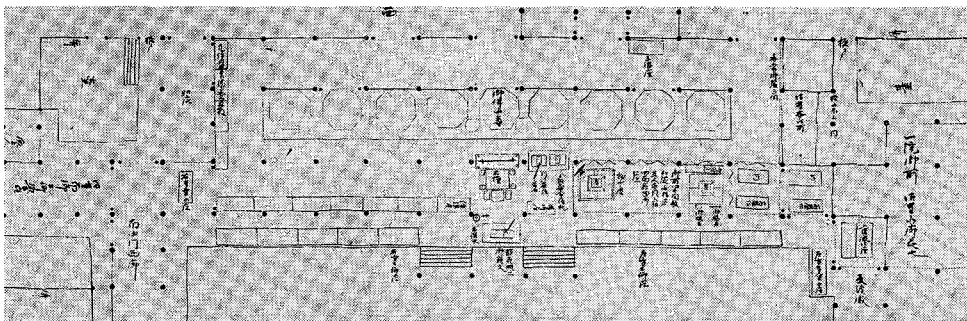


図6 福勝院の九輪阿弥陀堂（重要文化財『兵範記』京都大学附属図書館所蔵より）

調査の成果

設けたことの記事とも関連するものである〔浜崎90〕。このように病院 構内北半から医学部構内の南半には福勝院に関わった遺跡が存在していることが明らかになりつつある。

中世・近世の溝と地割 AH19区の調査では、東西方向に伸びる中世の溝がほぼ同位置に繰り返し掘り直され、さらにその上に近世後半の溝や現代の字境界も重なることが確認された。この境界が中世以降現代まで踏襲されていたものと考えられる。こうした京都大学構内各所で検出してきた地割に関連する遺構と、近年検出の進んでいる六勝寺に関連する遺構を結びつけ、法勝寺造営に始まる院政期に整備された白河街区の復原を試みた（第4章参照）。

中世の鑄造工房 AJ19区では、鋳型、鑄の羽口、埴塙が出土した。教養部構内での平安時代のものとあわせて、医学部構内で確認した梵鐘鑄造遺構をはじめとする鑄造関連遺構・遺物に新たな資料を加え、中世白河の鑄造工房の実態を考える資料となった（第5章参照）。

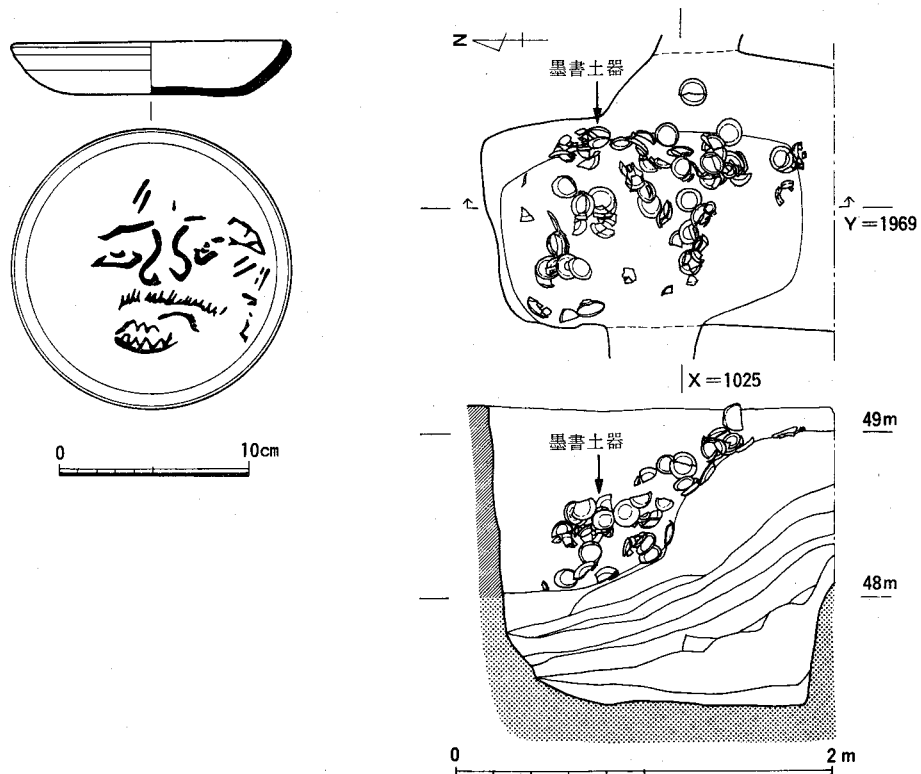


図7 SK3の墨書土器出土状況 縮尺 遺構1/40 遺物1/4

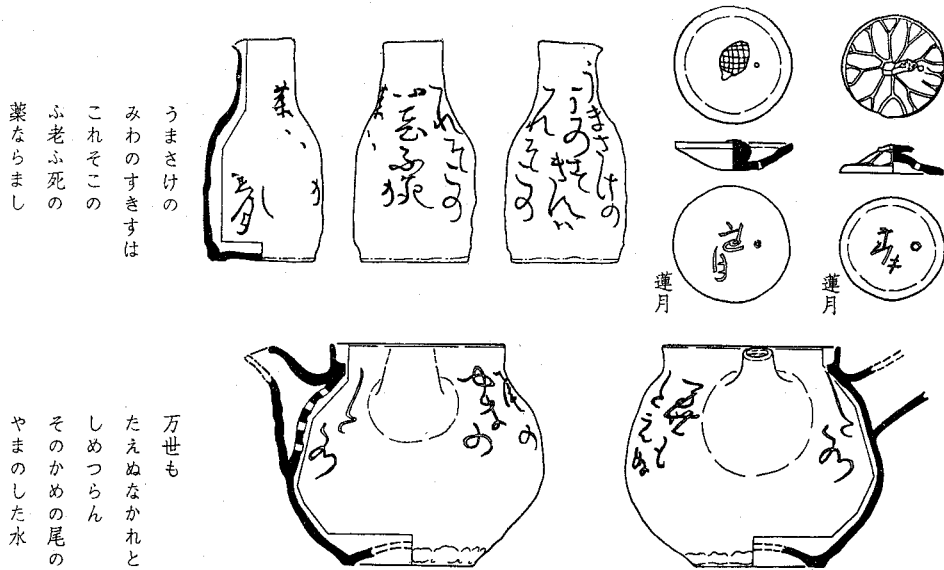


図8 蓮月焼 縮尺1/4

中世・近世の土取り 医学部構内から病院構内にかけては、14世紀から18世紀にいたるまで継続して土取りのおこなわれていたことが明らかになった。時期の推移と共に、土取り穴の形態にも変化のあることが観察されている。また、採取された土の用途については、中世鑄造工房との関連が注目される（第6章参照）。

蓮月焼 幕末の歌人として著名な大田垣蓮月の手になる蓮月焼をAF19区の土坑SX1から検出した「浜崎・宮本87」。調査区は富岡鉄斎の「聖護院村略図」に表わされた蓮月の住居のすぐ裏手にあたる地点である。出土した蓮月焼は德利、急須、蓋、鉢などからなるが、製作技法の違いから蓮月以外のの手になる作品も識別されている。この土坑からは他に日常雑器が多数出土しており、19世紀中葉の一括遺物として貴重な資料となった。

〔参考文献〕

- | | | |
|-----------|-------|---|
| 泉 拓良 | 1977年 | 「京都大学構内遺跡と調査の概略」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』 |
| | 1978年 | 「京都大学病院遺跡AH17区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』 |
| 泉 拓良・宇野隆夫 | 1978年 | 「昭和52年度 京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』 |
| 泉 拓良・浜崎一志 | 1981年 | 「京都大学構内の試掘・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』 |

参 考 文 献

- 五十川伸矢・浜崎一志 1989年 「京都大学病院構内A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 宇野隆夫 1981年 「遺物の考察」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
- 岡田保良 1977年 「京都大学病院内遺跡A E 15の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 1979年 「京都大学構内遺跡と京・白河」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 1981年 「層位と遺構」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白河北殿北辺の調査—』
- 岡田保良・宇野隆夫 1978年 「京都大学病院遺跡A F 14区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
- 川上 貢 1997年 「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
- 1979年 「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 1981年 a 「京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ—白川北殿北辺の調査—」
- 1981年 b 「昭和55年度京都大学構内遺跡調査の大略」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1987年 「昭和59年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 1988年 「昭和60年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 1989年 「1986年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 1990年 「1987年度京都大学構内遺跡調査の概要」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 京大遺跡調査会(京都大学構内遺跡調査会)
- 1988年 『京都大学医学部附属病院構内の遺跡—A H 19区発掘調査現地説明会資料—』
- 杉山信三 1962年 「院の御所と御堂」『奈良国立文化財研究所学報』第11冊
- 浜崎一志 1983年 「昭和56年度京都大学構内の試掘・立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
- 1984年 「京都大学病院西構内A F 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
- 1990年 「京都大学医学部構内A L 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』
- 浜崎一志・宮本一夫 1987年 「京都大学病院構内A F 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
- 樋口隆康・亀井節夫 1979年 「昭和53年度京都大学構内遺跡調査の大要と成果」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
- 福山敏男 1943年 「六勝寺の位置について」『美術史学』81号, 82号



京都市立病院院内遺跡全景（南から）